

『マリッジブルーに愛される男』

✱

黒縁の伊達メガネを購入した。自宅に帰って早速つけてみた。

すると、携帯電話のバイブレーションが震えた。ポケットから携帯電話を取り出して、画面を確認してから通話ボタンを押す。

「もしもし？」

古くからの友人が電話越しに言った。「もしもし、元気？」

『元気だよ』と伝えようと思った僕の言葉を遮った古い友人が食い気味に話をつづけた。

「あの子、聞いて欲しいんだけど良い？」

『もちろん』と伝えようと思った時にはもうすでに電話越しから彼女の言葉が聞こえていた。

「あの子、私、結婚することになったの。何度も相談してたじゃん？ 高校時代から付き合っていた彼。あなたも何度か会ったことあるでしょ？ この前、彼からプロポーズされちゃったわけ。で、別に断る理由もないから、いいよ。って言うしかなかったんだけどさ、もう十年以上も付き合ってきたわけでしょ？ 結婚する前から家族みたいな存在になっているわけじゃん？ でさ、聞いてよ。プロポーズもさ、綺麗な夜景が見える高級レストランでとかさ、ヘリコプターをチャーターしてとかさ、草原のど真ん中でとかさ、考えれば色々あるわけじゃん？ 一生に一度あるかないかも分からないプロポーズなのに、どこでされたと思う？ 普通にリビングでぼんやりお煎餅を食べてくつろいでいるときに何か思い付いたように、『結婚でもすつか』だよ？ ありえなくない？ 何なら私、寝そべってお煎餅を噛み砕きながら『別にいいよ』って勝手に言ってたんだからね？ まじであり得ないんだけど！ って思ったの。服装なんて上下黒のジャージだったし、靴下なんて片方しか履いてなかったんだからね？ しかも、裏表逆……。ねえ、何とか言ってよ！ てかさ、彼との結婚どう思う？ 合うかな？ まあ私的には十年以上も一緒に寄り添った仲だから別に合うも合わないもない気がするんだけど、一応、私とあなたは古くからの友人なわけじゃん？ だから率直な意見を聞きたいなあとか思ったりしているわけよ。あ、でも、もう何を言われるかって大体見当はついているんだけどね。だって私たちの付き合いも相当な歳月が流れているわけだからね。あ、そうだ。今ふと思ひ出したんだけど、てい

うか、その気持ちが沸々と湧いてきたって表現を用いた方がいいかもしれない。あのさ、私プロポーズされたじゃん？ で、良いよって承諾したじゃん？ でさその瞬間、なんか急に檻の中に放り込まれた気分になったのよ。なんでもかは分からないんだけどさ、今までは、付き合っています。っていう目に見えない約束事みたいなものだったわけじゃない？ それが法律的に、この人と結ばれています。ってなるわけじゃん？ 別に何も変わらないと思うよ？ 思うんだけどさ、なんかぎゅーって締め付けられている感じがするのよね。本当にこの人で良いのかな？ とか、結婚してから運命の人に出会ったらどうしよう。とか、私は結婚生活を全うできるのかしら？ とか、子供が生まれたら子育て出来るのかな？ とか、自分の時間が無くなるって言うけど大丈夫かな？ とか、プロポーズされてからあれこれ色んな不安が滝のように頭の中に流れ込んでくるわけ。それで思ったの。今までの私は、果てしない草原を自由に駆け回っていたんだって。それが急に狭い檻の中へ放り込まれてしまった。私、可哀想だと思わない？ このさき八十歳まで生き抜くとして後五六十年は檻の中に放り込まれたままになるのよ？ この、不安で不安で夜も眠れなくなる気持ち分かる？ やっぱりやめといった方がいいのかな？ こんな気持ちで結婚したら相手に迷惑かけちゃうよね？ でも、彼以外に結婚は考えられないと思うの。だって、高校生の頃から一緒にいるのよ？ うーん、悩みどころよね。でも、これで断ったら絶対後悔すると思うの。あなたもそう思わない？ なんかさ、一時の迷いほど恐ろしいものはないっていうじゃん。一度きりの人生なんだから思ったようにやるのが一番よね。でもなあ……。あ、そういやこの前のテレビ見た？ あなたが好きそうな和菓子屋さんが出てたわよ？ 創業三百年以上の老舗のお店。桜もちが有名で場所は曳舟駅だった気がする。駅に着けば大体の場所は分かる気がするけど。あの映像見た瞬間、あなたの顔が思い浮かんだの。これは報告しないって！ 是非行ってみて……。あ、話が逸れちゃってごめんね。どこまで話したっけ？ そうだ。でね、色々悩むわけなのよ。やり残したことがまだまだある気がしてさ。あれ？ そういえば私言ったことあったっけ？ 私が海外志向っていう話。もしかしたら伝えたことがあるかもしれないんだけど、私、将来的には海外に住みたいってずっと思ってたの。ロンドンにも行きたいし、ニューヨークにも興味があるのよねえ。これを機に思い切って一人旅を試してみてもいいのかもしれないなんて考える時もあるんだけど、それってどう思う？ やっぱり彼を裏切ることになっちゃうよね？ 一度、プロポーズを受け入れたわけだし、もう結婚に向けて舵は切られているわけだもんね。なんだかんだ言って不安なのよ、私。これだけああだこうだ言ってもさ、結局はプロポーズを受け入れて結婚生活を歩んでいくことになるんだろうけど……。でも、そうじゃなかった時の道を想像してしまうと、本当にこれで良いのかな？ って思っちゃうわけ。彼と別れて单身海外に行って、自分の人生を謳歌して、もうやり残すことはない！ っておもえてからでも遅くないんじゃないかとか思っちゃうのよ。やっぱり不安なのよ。この先、結婚生活をまっとう出来るのかなあって……。はあ、なんかごめんね。愚痴ばかり聞いて貰っちゃって。でも、今日だけはゆるして。本当に不安でいっぱいなのよ……。でも

私、正直嬉しかった。場所はどうかあれ、プロポーズされて嬉しかった。これも本当の気持ちなの。彼も彼で多分、緊張していたのよね。『結婚でもすっか』って素っ気なく聞こえたけど、内心は緊張していたのよね。勇気を出して言ってくれたんだもんね。彼の気持ちを受け入れるべきよね。彼と二人で支え合って生きていくべきよね。そうなの、嬉しかったの。プロポーズして貰って嬉しかった。この世には結婚したくても出来ない人だっているわけだもんね？ それに比べたら私、恵まれている方だよね。そうだよ？ 何か私、欲張りになってたかもしれない。今、そう思った。プロポーズされて、勝手に未来が変わっちゃうような気がして、勝手に焦っていたのかもしれない。でも、今あなたに話を聞いて貰って彼にプロポーズされて嬉しかったって本気で思えた気がする。不安で景色が歪んで見えていたのかも。私、プロポーズをちゃんと受け入れて、頑張ってみる。なんだから私もあなたと話していると勇気が湧いてくる。これって不思議よね。これが信頼し合っている証なのかな？ なんだかスッキリした。いつもありがとね。私は私で何とかやっていきますのであなたもあなたで頑張ってください。またいつでも話聞かせてね。私も何かあれば言うようにするから。いつも相談乗ってくれてありがとう。それじゃあそろそろ切るね。さようなら」

彼女が電話を切るまで、僕は冒頭の『もしもし』としか話さなかった。相槌すら打っていない。何なら携帯電話を耳に当てていなかった。スピーカー機能を活用しないまま自宅の床に置いていたのだ。だから僕は彼女の話を何一つ聞いていないことになる。でも一度だけ、彼女がまだ話しているかどうかを確かめるために右耳に携帯電話を押し当てたところ、

『あなたが好きそうな和菓子屋さんが出てたわよ？ 創業三百年以上の老舗のお店。桜もちが有名で場所は曳舟駅だった気がする。駅に着けば大体の場所は分かる気がするけど』

と聞こえてきたから僕は、『大した話してないじゃないか』と思って又、携帯電話を床に置いた。でも、彼女からすれば僕は彼女の話を一言一句聞いていたことになる。『それって不思議な現象だなあ』と思いつつも彼女が話している間、僕はお気に入りのソファに腰掛けながら毎週録画している、『新婚さんいってらっしゃい』を観ていた。

なんであの番組はあんなに面白いんだ？

『新婚さんいってらっしゃい』が終わりを告げた後、携帯電話を耳に当てた僕は、彼女との通話が途切れていることを確認した。

携帯電話をポケットに閉まって、財布を手にとって、黒縁メガネを付けたまま玄関先へと向かった。

曳舟駅に辿り着いた僕は、彼女が言っていた創業三百年以上の和菓子屋を探すことに決めた。

『駅に着けば大体の場所は分かる気がするけど』と言っていた彼女の言葉に頼り切っていた僕は途方に暮れた。まったくもって場所が分からないのだ。歩いている犬に訊ねても『ワンワン』としか言葉が返って来ないし、歩いている猫に訊ねても『ニャーニャー』としか返って来なかった。

立ち止まって途方に暮れていると、プロレスラーのような身なりの人間が声を掛けてきてくれた。

「どうしちまったんだ？」

僕は、彼を凝視する。虎なのか馬なのか分からない覆面を被り、髪の毛は三つに編んでいた。身長は百八十センチほどで、がっしりとした肉体を露わにしている。上半身は裸で下半身は黒いタイツみたいなものを穿いていた。

僕はそのプロレスラーみたいな人間の質問に答えようとした。

「実は……」

右手で制した虎馬プロレスはこう言った。

「言葉にしくなくても表情を見れば一目瞭然。黙って俺についてこい」

僕は一瞬、『どうしちまったんだ？』ってあんたが訊ねて来たんじゃないか。と憤りを見せかけたが、この憤りで彼がトラウマを抱えてしまったら元も子もないと思ったから自分の中の感情をうまいこと宥めて、『わかりました。ついていきます』と言った時にはもうすでに彼は前方三四メートル先に足を進めていたから慌てて彼の背中を追いかけた。

彼は目の前に立ちはだかる人間たちをお得意のラリアットでなぎ倒し、スムーズに歩を進めていった。

なぎ倒された側も『やられたあ』とか『覚えとけよ』とか『次こそは』とか、それぞれが何かの役に入り込んでいるのか、大げさに道端へ倒れこんでは何やら言葉を発していた。その横を、『すみません、すみません』と言いながら歩く僕に『いずれ君もこっち側

になるさ』とか『年を食えば諦めがつくんだ』とか『今のうちにやれることやっつけよ』とか言ってくれるもんだから僕は嬉しくなって、幼いころから学んできたソーラン節を披露したいという想いがふつふつと芽生えてきたが、そこはぐっと堪えて無視をした。

前方の信号機が赤色になった。

虎馬プロレスがどうやって赤信号を渡るのか興味を持ったが、彼は律義に信号機の規則を守り、立ち止まった。

僕は、『偉いですね』と言った。すると、信号待ちをしている虎馬が優しい口調で言ってきた。

「……実は俺、もうすぐ結婚するんだ」

おめでとうございます！ と両手で思いつきり拍手をして祝福したい気持ちをぐっと抑えた僕は、何も言わずにただ前を眺めていた。

「もうすぐパパになるんだ」

と虎馬が言った。

「子供も嫁さんも守れるように、もっともっと強くならなくちゃ駄目だ」

「結婚生活に不安はないのですか？」

僕は、まるで僕じゃない人格が話しているかのような気分になりながら訊ねていた。他人の結婚生活に対する不安感なんて正直言って興味がないのに。

赤信号を見つめる虎馬は覚悟を持った表情をしていたに違いない。(虎かも馬かも分からない覆面をかぶっているからそんなのわかるはずないけど何となくそう思った)

覆面の中に潜む覚悟が、彼の思いを吐き出させている。

「不安がないって言ったらそりゃあ嘘になりますよ。でもね、その不安も含めての結婚、育児なんじゃないかなあと思っています」

その時、前方の信号機の色が変わった。僕は習慣に倣って横断歩道を渡ろうとする。二歩歩いて振り返ってみると、虎馬はその場に立ち尽くしていた。

僕は、『面倒くさいなあ』と思いながらもわざわざ彼の立つ場所まで戻り、声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

僕の言葉が耳に届いたのか、ふと我に返った虎馬は少し照れた表情を見せて、（なんかわけのわからない動物の覆面を被っているからそんな明確には見えないけれど）鼻の下を擦りながら言った。

「色々考えていました」

僕は、『いつになったら和菓子屋へ連れて行ってくれるんだよ』と本来の目的を思い出したものだが一瞬に焦りと苛立ちが沸き起こり、その、わけのわからない覆面をはがしてやろうかとさえ考えてしまった。

「でも、お兄さんに道案内しているとんだかすつきりました。ラリアットしたからっていうのもあるかもしれないけれど……」

一段と照れた表情らしきものを見せた虎馬が続けた。

「俺、そろそろ面接の時間なんで行きます。これから嫁さんと子供を養っていかなければならないですから」

当たり前のように立ち去ろうとする虎馬に向けて声を掛けた。

「面接？」

「お花屋さんのアルバイトの面接です」

僕は、目を丸くした。

でも、そこでめげないのが僕の良いところである。

「君にぴったりだと思う。もちろんこの発言にお世辞は含まれていない……」

虎馬は最後まで言葉を聞かずに去っていった。だから僕は誰にでもない誰かに語尾を伝えた。

「……はずだ」

虎馬の後ろ姿が段々小さくなっていく。五メートル、十メートル。上半身裸の彼を訝しげに眺める通行人たち。もし、僕が彼のことを何も知らなかったら訝しげに眺める彼らと同じような気持ちになっていたんだろうなと思った。

虎馬が唐突に立ち止まりこちらへ振り返った。

「ありがとうございます！」

十五メートルくらい離れた場所から大きく手を振ってお辞儀をする虎馬。周りの人間たちが僕と虎馬を交互に見ていた。僕は、『頑張れよ！』と言いたい気持ちをぐっと堪えて盛大に無視をした。

僕は、彼の人生がうまく回ればいいと切実に願っている。

それから、四時間かけてどうにか和菓子屋さんにたどり着いた。虎馬が導いてくれた方面はまったくの出鱈目だった。なんなら、反対側だった。『ふざけんなよ！』と思いがちでも、『自分が場所を調べてこなかったのが悪い』と自分のせいにして突き進む僕にもう一人の僕が拍手を送る。

『何はともあれ、たどり着いたんだからいいじゃないですか』

行列に並ぶ僕は、後ろの二人組の会話に耳を傾けていた。

「お前、明日の試合出られそう？」

「わかんないよ。それは監督が決めることだから」

「馬鹿だなお前は。監督にすべてを決められていいのか？」

「でも、監督が決めないで誰が決めるんだよ」

「監督に決めさせるんだよ」

「どういこと？」

「選ばざるを得なくさせるんだよ」

「そういう君は試合に出られるの？」

「当り前じゃないか」

「どうして？」

「監督の不倫現場を押さえたから」

「え？」

「で、その写真を見せて替したら明日の試合のスタメンを確約された」

「え、ずるい」

「戦略だよ。選ばれないとアピール出来ない。だから選ばれるためにどうすればいいかを考えたらこの答えにたどり着いた」

「いいなあ」

「本当に試合に出たいのならそこまでするべきだよ」

「そうなのかな？」

「実力だけじゃ生きていけない世界はごまんとある。そういうときはここを使うべきなんだよ」

「ここ？」

僕は、後ろで会話する人間たちがこめかみの辺りを押さえている姿を想像していた。試合に出るために実力を磨くのではなく相手の弱みを握って戦略的に仕掛けるといふ暴挙に出た人間を一目見てやろうと思った僕は、ちらりと振り返った。

すると、おへそを押さえる老婆が二人並んでいた。

僕は思わず『え、何の試合？』と呟いていた。

その時、店の中から声が聞こえてきた。「次の方どうぞ」

和菓子屋の店内に入って五秒で買うものを決めた。

「これを十五個下さい」

四時間も迷ったのに、五秒で事を終えることに切なさを感じてしまった。

『もっとじっくり考えたほうが良かったのではないか？』と思う僕の脳裏に、『いや、そもそも四時間も道に迷うお前が悪い。なんならその四時間を取り返すために五秒で事を終えたあんたは英雄だよ。なぜなら、一日は二十四時間しかないのだから』と出会ったことのない人間の声と身なりが想像上に浮かんで、僕をげんやりさせた。

頼んだものを袋に詰め終えた店員さんが言った。

「お会計が三千と三百円になるのですが、私、もうすぐ結婚するんです」

は？ この言葉が口に出ていたかは分からない。

「私、もうすぐ結婚するんです。大丈夫ですかねえ？ 友人に対しては、『絶対大丈夫だから！』って励ますことが出来ていたのですが、自分のことになるとなかなか、大丈夫って言い聞かせられないんですよ。これって駄目なことなんですかね？ 私、いつもそんなんです。恋愛でもなんでも、誰かに相談されると、すぐに解決策が浮かんできて、余裕をもって相槌を打って、相手の不安を受け入れてあげて、『大丈夫、自分を信じて』って言えるんですけど、自分のことになるとさっぱりです。本当に大丈夫なのだろうか？ これで良いのだろうか？ と思ってしまいます。不思議ですよ。自分のことも、どこか他

人事のように思えばいいのですが、中々そうもいかないですよ。主観と客観の難しさを実感しています。あ、一つ断っておきますけど、相手に不満があるとかではないんですよ？ 彼は私にとって最高のパートナーだと思います。相性もぴったりなんです。ああ、あっちの方も……。もう！ こんな恥ずかしいこと言わせないで下さいよ。でも、本当なんです。初めて会った瞬間、ビビッって電気が走るとか言うじゃないですか？ 私、それだったんです。彼の目を見た瞬間、雷に打たれたような気持ちになりました。それから順調にお付き合いに繋がって、順調にプロポーズまでたどり着きました。私は、大満足なんです。だけど、それとは別になんだか胸の奥にもやもやしたものがありまして、言葉では言い表せない複雑な感情なんです。結婚生活が始まれば覚悟が生まれるとは思いますが、それまでの時間が私の想像力を悪い方へと導くんです……」

店員はそこでため息を一つ漏らした。

そして、僕の日を見て言った。

「あの、三千三百円払って貰ってもいいですか？ 他のお客様がお待ちなので」

振り返ると、老婆が二人並んでいた。『一体、何の試合だったんだろう？』という疑問が浮かび上がってきたが、すぐさま首を横に振って追い払った。『別に自分が知ることではない』と言い聞かせて、財布の中から三千三百円を取り出した。

「なんか好き勝手に喋ってしまってごめんなさい。でも、おかげでスッキリしました」

と言った店員さんの顔はさっきよりも晴れやかに見えた。

「レシート、いりますか？」

僕は、首を横に振ってから荷物を受け取ってその場を後にした。

又、四時間迷って曳舟駅にたどり着いた僕は空を見上げていた。暗かった。行きと帰りで合計八時間。『一日の三分の一を道に迷うのも悪くなかったね』と自分に言い聞かせてやった。

『電車に乗る時間を含めたら十時間だね。一日の十二分の五だね』と誰かが言い返してきたから僕は暗闇の空に向かって、『馬鹿言ってるじゃないよ』と呟いてやった。

電車に乗って帰るのも億劫だと感じた僕は、道路を走るタクシーに手をあげて、停止したタクシーに乗り込んだ。

乗り込んだ僕に、『行き先はどちら？』と運転手が訊ねてきた。僕は迷わず『駒沢大学駅までお願いします』と告げた。

『駒澤大学駅前ね。任せておいて』と言った運転手はアクセルを踏んだ。

しばらく、窓の外を眺めながら物思いに耽る。ようやく一日を振り返る時間を設けることができた僕は、変わりゆく景色に感謝する。

古い友人からの電話に始まり、虎か馬かも分からない覆面プロレスラーと出会い、何の試合かも分からない老婆の会話を耳にして、和菓子屋の店員の唐突の告白。

過去の記憶を振り返って、『もっとこうしておけば良かったなあ』と反省する時間が好きなかもしれない。

「お客さん、ちょっといいですか？」

唐突に、運転手が話し掛けてきた。

僕は声を出した。「はい？」

「三度目の結婚ってどう思います？」

『そんなもん知らんがな。自分で考えたらよろしいがな』と喉元まで出かったが、そう伝えた後に、何十分も車内で共に過ごさなければならぬことを想像すると、恐ろしくらいの寒気が襲ってきたから僕は、『どうなんでしょうね？ 僕は抵抗ないですけど』と伝えた。

運転手は、『そうですよね』と呟いてから、『はあ』と大きなため息を漏らした。

それから車内には十秒ほどの沈黙が訪れた。

BGMとして流れるラジオの声だけが流れていた。

ずっと窓の外を眺めながらどうにかやり過ごすことも考えたが、この沈黙の間、ちらちらとバックミラー越しに何度も様子を窺ってくる運転手からの、『聞いてくれよアピール』が凄いもんだから僕は、『どうかしたんですか？』と聞きたくもないのに、訊ねていた。

「お客さんもお好きですねえ」と、運転手が言った。

図に乗っている運転手を尻目に、『僕、結婚したことがないので気になってたんです』と完全なる出まかせを発した。出まかせが自分の耳に届いたとき僕は、『自分は一体、何のために生まれてきたのだろうか？』という疑問と向かい合っていた。

たかが数十分。駒沢大学駅までの数十分の気まぐさと向き合うのなら、自分を偽って相手が求める言葉を選ぼうとする自分の愚かさが顔をのぞかせていた。

「五十歳になろうが、三度目であろうが、結婚が刻一刻と迫っている……この時間を過ごすのは、いつも胸が締め付けられる思いです」

僕はしびれを切らして、『だから何?』と言いかけたが、駒沢大学駅にたどり着くには少なく見積もっても後十五分は掛かりそうだから、『大丈夫ですよ、きっと』と励ましの意味合いも込めて温かい言葉を手渡した。

「お客さん、結婚は?」

「まだ一度もしてません」

「恋人は?」

「できればいいんですけどねえ」

僕の言葉を噛みしめているように見える運転手が言った。

「結婚は良いよ。他人同士が結ばれて長い時間同じ空間で過ごすって物凄いことだよ。どちらかが寄り添い過ぎても亀裂が生じるし、かといって、どちらも寄り添わなければ亀裂が生じる。あのバランスって難しいよな。ずっと良い状態が続くわけがないのに、悪い状態が一度でも訪れたら、ああだこうだと大喧嘩だったよ。でも、その大喧嘩のおかげで絆が深まったりもしてな。どんなことがあっても最終的に手放さなければ関係は続いていくんだよ。でも、どちらかが手放してしまえばもう終わり。結局、一人では出来ないものなんだよな。一人目も二人目も、これから育む三人目も大好きなんだよ。それぞれ良いところもあって悪いところもあってさ、それを受け止めて一生歩んでいこう。という覚悟は持っているはずなんだけど、気が付けば自分の欲望がまさって突き放してしまう。なんだかんだって皆、自分のことが好きなんだよな。誰かのためとか世界のためとか言ってる奴ほど、自分のために動いている気がする。もちろん、ほんの一握りの人間は本当に誰かのためとか世界のために自分を犠牲にして動いているだろうけど、そういった奴らは今の世の中では損しちまうさ。だって誰も見てくれねえんだもん。皆、自分だけしか見ねえ。自分のことで一杯一杯なんだよ。俺だってそうだ。自分のことで一杯一杯だ。他人を見る余裕なんてありやしねえ。でもよ、心の奥底では少なからず思っているんだよ? もっとしっかりしないと。欲まみれにならないようにしないと。ちゃんと正常な目でこの世界を眺めないとな……でも、今の世の中の流れが速すぎる。そんなゆっくり物事を眺めていると置いて行かれちまうよ。なあ、少年。三度目の結婚ってどう思う? 中々慣れねえなあ。まさか俺が三回も結婚するなんて思いもしなかった。ああ、これは少年に初めて言う

んだけどよ？ 俺、一度目と二度目の結婚は女性として結ばれたんだ。でも、三度目は男性としてだ。自分に嘘を付きたくなかったんだろうな。ようやく、納得した形で結婚できるんだ。心と身体を一致させるのは簡単なことじゃないよなあ。男として迎える初めての結婚。不安があるなあ。でも、なんとかなるよなあ」

運転手はバックミラー越しに僕の目をちらりと見つめた。

僕は、『なんとかなりますよ、きっと』と力強く言った。

『ありがとな』と言った運転手は、ブレーキを踏み、タクシーを路肩に止めた。扉を開いた運転手は、『お会計はいらねえ。聞いてくれてありがとな。おかげで頑張れるよ。また乗ってくれよな。次乗ってくれた時、四度目の結婚だ。なんて言わないようにしないな』

どこか活き活きとしている運転手の姿を見て僕の肉体には、『嬉しい』という感情が沸き起こっていた。

クラクシヨンの一つ鳴らしたタクシーが去っていく。知らぬ間に手を振っていた僕は、微笑んでいた。そして、深呼吸をして辺りを見回した。

すると、見たことのない景色が広がっていた。『え、ここはどこだ？』と思った僕の視界に、『駒場東大前駅』という文字が入り込んできた。

『あれ、駒沢大学駅って言ったよね？』と頭の中で訊ねた僕にもう一人の僕が、『もしかしたら駒場東大前駅って聞こえていたのかもしれない』と言ってくるもんだから、『その可能性もあるよなあ』と自分に言い聞かせて、『まあいいか』と思って歩いて帰ることにした。

少し歩いていると、『占っていくかい』と路上から声が聞こえてきた。

道端に小さな椅子と机を設け、いかにも神秘的なエネルギーに包み込まれていそうな老婆がこちらに目を向けている。

僕は、『これも何かの巡り合わせかもしれない』と思って老婆の眼差しに応えるように小さく肯いた。

「どうぞこちらへ」

と手招きする老婆の前にある小さな椅子に座った。

「三十分三千円。よろしいですか？」

「よろしいです」

と言った僕は、財布の中から三千円を手渡そうとした。

「後払いです」

と老婆は答えた。

「ここに名前と生年月日を書きなさい」

手渡された紙に名前と生年月日を書いて渡した。受け取った老婆はしばらく、虫眼鏡のような物で僕の書いた文字を細部まで確認し、ふんふん。と小さくうなっていた。

僕は、なんだか頭の中や体の中を覗かれているような気分陥ってムズムズした。

「こりゃあ、珍しい」

と虫眼鏡を置いた老婆が言った。

「さて、あんさん……何が知りたい？」

僕は、頭の中で何が知りたいのか考えたが、特にこれといって思いつくこともなかったから、『明日の試合出られますかね？』と何となく頭に残っていたおもいを口に出した。

その言葉を自分の耳で聞いた瞬間、やっぱりの、『おへそを押さえたお婆さん二人組が何の試合に出るのか気になってたんじゃねえかよ』と面白おかしくなった。

目の前にいる老婆は、僕が今日二人の老婆に出会ったことなんて知らないから、思わず吹き出してしまいそうな僕に少し怪訝な態度を見せたが、どうにかこうにか気を取り直したみたたく、ふうと一つ深い呼吸を見せた。そして、老婆は僕を見て言葉を発した。

「もうすぐ、結婚するんじゃ」

は？ この言葉が口に出ていたかは分からない。

「あたし、もうすぐ結婚するんじゃ」

僕は完全に驚いた表情をしていたと思う。

「そりゃあ、驚くよな。こんな歳で結婚じゃあて……」

『いやいやいや……そこに驚いているわけじゃないんですよ。もっと驚くべきところが山ほどあるんですよ』と突っ込みを入れたくなったが、『三十分三千円』取られている状況

下で、つまらないことに時間を取られるのは勿体ないと思った僕は、『いえ、そんなことないと思いますよ』と伝えていた。

僕の言葉に気をよくしたのか老婆は、『初婚でも?』と少し恥ずかしそうに付け加えた。

「自分を貫き通す勇氣があるものだけが人生を謳歌できるんじゃないですかねえ。占い師さんの決断はとても素晴らしいと思います」と、勝手に口走っていた。

「あんさん、ありがとう」

老婆が続けた。

「やはり、とすべきか周りは反対する人間が多いんじゃない。あんさんが初めて肯定してくれた」

「僕は、本音を伝えているだけです」と、潤んだ老婆の目を見て答えた。

老婆はハンカチーフを取り出して目元を拭くと、一つ深呼吸をした。少し乱れてしまった感情を整えようとしているのだろうか? それとも、職務を全うするためにスイッチを切り替えようとしているのだろうか?

老婆は僕の名前と生年月日が書かれた白い紙を手に取り、三十秒くらい何かを考えるように見つめていた。そしてある時、徐に、うん。と呟いた。

手に持つ紙を机に置いて、こちらを見つめてくる。

僕は、ごくりと息を飲んだ。

果たして、試合に出られるのだろうか?

覚悟を持った彼女の口元がゆっくりと動き始めた。

「少しばかり相談してもいいかのう?」

ん? と一瞬思った僕は無意識的に、『良いですよ』と答えていたらしい。

「ありがとうございます。ありがとうございます」
気持ちのこもった老婆の声が聞こえてきた。

「あんさんが初めて肯定してくれたもんじゃから」

僕は、『分かりました』と言った。

彼女は、少女のような微笑みを見せた。

誰かに肯定してもらえている安心感を胸に、言葉を紡ぎ始めた。

「もう、現世で結婚はしねえと思ってた。じゃけど運命はいたずらに動き出すものなのだなあ……」

僕は老婆の話を聞いた。

運命の相手との出会いから結婚に至った経緯まで事細かに伝えられた。

夢と現実の狭間で揺れる葛藤。

両親にウエディングドレス姿を見せたかった想い。

お相手はもうすぐ二十歳になるフィンランド人。

嬉しそうに話す彼女の乙女のような声色を耳にしていると、

何だかすべてが清らかに思えてきた。

路上を歩く人間たちは、僕が老婆に相談していると思い込んでいるのだろうが、実際はその逆だ。

僕と老婆しか知らないこの関係性に妙な親近感を抱いてしまった僕は、無意識的に老婆の頭を撫でていた。

今まで誰にも言えずに溜め込んできた想いが溢れ出す音が聞こえた。老婆の目からは涙が零れ、不安や緊張が零れ落ちていく。彼女の想いを受け取った僕は、しばらく何も言わずに彼女を見守った。

彼女の肉体ではありとあらゆる想いが交錯しているのだろうか？

外に吐き出せば楽になる想いを誰にも言えずに心に留めてしまう。そのうち、自分では制御できなくなつて爆発してしまう。八つ当たりをしたり、自分を傷みつけたり、殻に閉じこもってしまったら……。

爆発の仕方はそれぞれだろうが、どれも心が、悲鳴を上げている。

「一人で抱え込むのは良くない。辛かったね」

僕は彼女の頭をポンポンと撫でた。

『ありがとう』と言う彼女は机の上に置いたハンカチーフで目元を拭いた。そして、今にも消え入りそうな声で、『三十分経過しました。延長していくかい？』と言った。

僕は、首を横に振って財布の中から三千円を取り出して手渡した。

「すまんが税抜き料金、消費税代、あと三百円」
目を真っ赤にした彼女が言う。

財布の中身を見ると小銭が皆無だったので一枚、千円札を手渡した。
『お釣りは持ち合わせておらん』と言う老婆の表情が曇った。

僕は慌てて、『じゃあお釣りは要りません。これは結婚祝いですね』と言いたくもない
ジョークを言ってしまった。

彼女は目元を潤わせた。今度は同時に微笑みも見せていた。
僕は泣き笑いを見せる彼女に、『さようなら』と告げて背中を向けた。

「明日の試合出られたらいいなあ」と、去り際の僕に老婆が言った。

家に帰るまでの間、老婆の声が頭の中から離れることは一度もなかった。僕にとっては
不毛な時間だったが、世界にとっては不毛な時間ではなかった。

どっと疲れた僕は、自宅に帰ると倒れこむように布団へ飛び込んだ。

もう何も考えたくない。

誰にも会いたくない。

ゆっくりさせてくれ。

と三拍子揃った思いが溢れ出して、一刻も早く眠りの世界に身を委ねたかった。
思いが通じたのか、僕は一瞬にして眠りの世界へ旅立った。

気が付いたとき、夢の中でマリッジブルーと会話をしていた。マリッジブルーという概
念そのものに、『私マリッジブルーなんです』と相談を受ける夢を見た。

夢の中で正座をしている僕は相手の目（夢の中のマリッジブルーは人間と同じように目
が二つ付いていた）を見て、うんうん。と相槌を打っていた。

『マリッジブルーがマリッジブルーになっちゃうなんて可笑しいですよね？』と言うマリ
ッジブルーに、『そんなことないよ』と首を横に振って受け入れる。

『何でもかんでも受け入れないでください。ダメなことはダメって言うてください』と言

うマリッジブルーに、『本当にそう思っているから……』と漏していた。

『あなたは優しさの意味をはき違えている。本当に大事だと思っているのならちゃんと叱ってください』と目を見て言ってくるものだから僕は、『正座をしていると足が痺れて集中できない』と思ってポケットに入っていた栃木県産のとちおとめを一口食べた。

『甘酸っぱい』と感想を述べた僕に、『恋愛と結婚を一緒にしないでください』と激怒するマリッジブルー。

とちおとめの感想を述べただけなのに、どうやらマリッジブルーは僕がマリッジブルーに対しての感想を述べたと勘違いして、『結婚は恋愛のように甘酸っぱくありません』と一刀両断したようだった。

『ごめんね』と言う僕に、『謝るなら最初から言わないでください』とマリッジブルーは言った。

『謝るというよりもあなたが誤っているんだけどなあ』と僕は思った。
だけど、口には出さなかった。

すると、夢の中では僕の思ったことすべてがマリッジブルーに伝わるシステムになっているらしく、マリッジブルーは、『全部私が悪いって言えばいいじゃないですか』と一段と怒りの色を濃くさせた。

その時、僕とマリッジブルーの間を急行列車が通過した。
五六秒のあいだ、通り過ぎる列車を眺めていた。

一瞬だけ、列車の中の乗客の姿が鮮明に見えた。
その人間は、老婆で虎か馬か分からない覆面を被っていてタクシーの運転をしながら和菓子を食べるハンカチーフで目元を拭っていた。

白目を剥いてしまいそうな僕をなだめるかのように急行列車は姿を消した。

僕は、『マリッジブルーに弁解しないと』とおもい辺りを見回した。空間の隅々まで探しても、マリッジブルーはもう、どこにもいなかった。代わりに、レイニーブルーを歌う徳永英明がステージ上で大きく手を振っていた。

僕は彼の歌が好きだ。

マリッジブルーのことなんて忘れてしまった僕は、うっとりした表情で歌を聴いていたのだろう。そして、大サビを迎えるとき、冷たい雨が降り注いできた。

レイニーブルーもう終わったはずなのに

レイニーブルー何故追いかけるの

あなたの幻消すように

私も今日はそっと雨

僕の身体がびしょびしょに濡れたところで夢は終わった。

目が覚めると朝だった。大量の汗が衣服にまとわりついていることを摘み取った。ベタベタの汗に胸糞悪さを感じた僕は、すぐさまシャワーを浴びてスッキリさっぱりした。

身体は綺麗になったが、心はまだモヤモヤしていた。だからドライヤーで髪を乾かしている間に思考を巡らせて最良の選択を考えていた。

聞き慣れたドライヤーの音と、見慣れた部屋の景色と、嗅ぎ慣れたヒノキの芳香剤の香りが絶妙にマッチングしたとき、僕の思考が一つの答えを導き出し、行き先が決まった。外に出る支度を終えた僕は、右ポケットに携帯電話、左ポケットに財布を入れて、『水族館』までのルートを頭の中で何度か反芻してから玄関の扉を開けた。

道を歩いているとふと、奇妙な夢を見た気がしたが、細かな内容までは思い出せなかった。

『きつと疲れているのだろう』と感じた僕は、何も考えないように肩の力を抜いて『水族館』という空間を楽しむことだけを考えて入り口から入館した。

入館してから一体、どれだけの時間が経ったのだろうか？

三十分。六十分。九十分。百二十分。

それとも、時間はまったく動いていなかった？

時間を意識していなかった僕は、時間の経過を見逃した。

その間、何をしていたかも覚えていない。

薄っすらとした記憶だけが、切れる間際の電球のように点いたり消えたり、脳内を照らしていた。

すべてのフロアを回ってすべての魚を見た気もするし、ここから一步も動いていない気

もする。

僕は、意識して世界を眺めた。すると、目の前の大きな水槽の中に並ぶジュゴンとジンベエザメの姿を捉えた。『この水族館にはジュゴンもジンベエザメも居ないはずだぞ?』と思った僕は辺りを見回した。

お客さんの姿も従業員の姿も見えなかった。
僕は一瞬、世界から放り出された気分になった。

「そんなこと気にすんなや」
と水槽の中のジュゴンが言った。
「そうそう。そんなこと気にしんとき」
とジンベエザメが言った。

ジュゴンとジンベエザメは、互いに顔を見合わせ、何かを共有し、こちらに視線を向けた。彼らは僕に戸惑う暇も与えてくれなかった。

一度に幾つもの疑問が飛び込んできたとき、開き直って潔く諦めることがある。
どうやら僕は、すべてを受け入れることに決めたらしい。

「俺たちもうすぐ結婚すんねん」

ジュゴンの言葉を温かく受け取った僕は、大きな拍手を送った。

「おめでとう」

「うちらのこと祝福してくれてんの? めっちゃ嬉しいんやけど」
とジンベエザメが言った。

「僕も嬉しいです。自分のことのように嬉しく思います」

「ホンマにおもてんの? それ」
と疑いの目を向けるジュゴン。

「うん。ホンマにおもてるで」
と僕は彼の口調につられて言葉を放った。

「イントネーションめっちゃうつってるやん。おもしろすぎ」
とジンベエザメが言った。

僕は潔く謝った。「すみません」

「そんなん気にすんなや。おもしろかったら何でもありやろ。なあ？」
「せやな。基本、面白いかどうかで判断してるところあるよな。うちら」

ジュゴンとジンベエザメは顔を見合わせてゲラゲラと笑った。

「間違いないなあ。人生、面白く居られるかどうかやろなあ」

「うちらの場合、そこ重要やんなあ」

「体の相性とか二の次三の次やもんな」

ジンベエザメの表情が一変した。「え、そうなん？」

地雷を踏んだかもしれないと思ったジュゴンは、話題を変えるのが得策だと思い、僕に話題を振ってきた。

「なあ兄ちゃん。ジンベエザメとジュゴンが結婚するとかめっちゃめっちゃおもしろない？」

僕は、素直に答えた。「めっちゃめっちゃおもしろいっす」

「やろ？ こいつと出会ったとき、バッチーンおもて、これや！ ってなったもんなあ。
ある意味えげつないくらいの一目ぼれやで。なあ？」

ジンベエザメは何も答えなかった。

「おい、そんな怒んなや」
とジュゴンが言った。

「別に怒ってないし」

「いや、バリバリ怒ってるやん。口がへの字になってもうてるやん」

「そんなん言わんというてや。への字とかなってへんし」

「いや、なってるって。ほんなら鏡見てみいや」

「別にそこまでする必要ないし」

「なんやねん。機嫌取り戻せや」

「別に機嫌悪くないし」

「めっちゃめっちゃ悪なってもうてるやん」

「なってへんて」

「おい、理由言えや」

「理由なんかないて」

「理由もないのにそんないきなり不機嫌にならへんやろ。お前もそう思うやろ？」

訊ねられた僕は、『はい。兄さんの言う通りっす』と勝手に口走っていた。

「別に身体の相性が二の次三の次とか言ったことに怒ってるわけじゃないしな？」とジンベエザメが皮肉を込めて言った。

「なんや。そんなことで怒ってんのかいな」

「なんやってなんやねん。あんたはホンマに最低やな」

「俺は最低な奴やで。そんな最低な奴ともうすぐ結婚するんはどこのどいつや？」

「ホンマにあり得へん。そんな言うんやったらもう結婚しいひんわ」

ジンベエザメの言葉に一瞬、たじろいたジュゴンが漏らした。

「それだけは勘弁してや」

「もう許さへん。うち、決めたから」

「姉さん、許してあげて下さいよ」

僕の口は勝手に動くようになっていた。

「ごめんやって。身体の相性も一番やって」

「一ミリもおもてない癖に」

「百メートルくらいおもてるわ」

「百メートルは短すぎ」

「ほな、四十二・一九五キロくらいおもてるわ」

「マラソンになってもうてるやん」

ジンベエザメの言葉に対して、ジュゴンは白々しく言った。

「あ、ほんまや」

「あ、ほんまや。ちゃうねん。あんた、ホンマにおもてるん？」

「ホンマにおもてるよ。なあ？」

「兄さん、僕と居るときずっと姉さんの話してますよ？ こっちがもうええわって言うてもずーっと姉さんと出会えて嬉しい。生涯ナンバーワンの生き物と出会えてしまったから、俺はあいつを幸せにせなあかんっていつつも言うてますよ」

「おい、あんまりペラペラ喋んなや」

ジュゴンの表情は言葉とは裏腹、『もっと喋れ。いい感じや』と言っているみたいだった。

ジンベエザメは少しずつ落ち着きを取り戻していった。
そして、ジュゴンの目を見て言った。

「今回は彼が言うてくれたから許すけど、次やったら離婚やで」

「まだ結婚もしてへんがな」

「そうやった」

「あほか」

「あほかもしれへん」

「まあそうやろな」

「まあ、あんたは大バカ者やけどな」

「間違いない」

ジュゴンとジンベエザメは顔を見合わせてゲラゲラと笑った。

「ほな、そろそろ行こか」

とジュゴンが言った。

「せやな」

「ちよっと先行つといて」

「分かった」

ジンベエザメはジュゴンの言葉を潔く聞き入れて去っていった。「ほな、またね」

僕は、深々とお辞儀をしていた。

ジンベエザメが遠くへ行ったとき、ジュゴンが口を開いた。

「さっきはありがとうな。おかげで助かったわ」

「全然ですよ。お二人にはずっと一緒に居て欲しいんで」

「そう言うてもらえて嬉しいわ。俺にはあいつしかおらへんからなあ。まあ、結婚生活は不安やけど頑張るわ。またなんかあったら助けてくれや」

「兄さんのためやったらなんでもやりますよ。またなんかあったらいつでも言うて下さい。飛んで行きますんで」

「ありがとうな」

とジュゴンが言った。

その目はとても輝いて見えた。

ジンベエザメの声が聞こえてくる。

「いつまで話してんの？ また疑わしいことしてるんちゃうん？」

「何もしてへんて！ すぐ行くわ！」

ジュゴンは水槽の前に居る僕の前まで近寄ってきて言った。

「なんやかんや尻に敷かれてるくらいがちょうどええわ。ほな、さいなら」

僕は、ジュゴンとジンベエザメの後ろ姿を見て思った。

もしかして……会話してた？

『自分の見えている世界と他人が見ている世界はまったく違う景色なのではないか？』と
思わずにはいられない今の僕の心情は、僕を正常な世界から遠ざけようとしていた。

あれからどうやって水族館を出たのか覚えていない。水族館までどうやって来たのかも
覚えていないし、これからどうやって帰ればいいのかも分からない。

だから何となく歩いてみた。

赴くまま足を進めてそこに映った景色を眺めて一つ一つに疑問を持った。

何のためにビルを建てたのだろうか？

何のために喫茶店があるのだろうか？

何のために音を聞いているのだろうか？

何のために目が見えるのだろうか？

何のために生きているのだろうか？

普段は当たり前すぎて考えることがない物事と向き合っていくうちに、僕はこの世界に存在する自分がとても恐ろしい場所に放り込まれていることを知った。意味のないことを永遠にやり続けている日常に薄々気が付いていながらも、そこに意味を持たせようと必死に自分の存在価値を見出そうとしている。

雑音を感じさせてくれない僕の思考は、深くまで潜っていく。頭の中を整理せずに、考えなくてもいいことに目を向け、無駄な時間を費やしている方が幸せなのかもしれない。と思わされた。

思考を深くまで落とせば落とすほど、生に対する絶望と向かい合うことになって、目先の欲望に程よく惑わされているくらいが丁度いいのかもしれない。

道を歩き続ける僕はふと、ある真実を掴み取った。

この二日間、異様なまでに結婚の相談を受けた。

花屋の面接に行ったプロレスラー。

和菓子屋の店員。

タクシーの運転手。

占い師。

夢の中のマリッジブルー。

ジューゴンとジンベエザメ。

出会う生き物、出会う生き物に相談を持ち掛けられた気がする。

まさか、新婚さんいつてらっしゃいを見ているからか？

いや、そんなことはないはず。ともう一人の僕が首を横に振った。

唯一まともだったのは、『和菓子屋の存在を教えてくれた古い友人だけだったなあ』と感慨深い気持ちになった。同時に、『持つべきものは友だなあ』と改めて思わされた。

その時、僕のポケットが震えた。

『まさか』と思って携帯電話の画面を見ると、その、まさかだった。

思いが通じ合ったように震えだした携帯電話の通話ボタンを押した僕は、古い友人からの言葉に耳を傾けるはずもなく、そっと携帯電話を地面に置いた。